九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

パタンヂャリとスポータ（Ⅰ）

清水，新一

https://doi.org/10.15017/2328554

出版情報：哲學年報. 45, pp.77-97, 1986-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

パタンヂャリとスポータ（I）

清　水　新　一

Ṛg-Veda に堰を切る古代インドの文献史は，不壊なることば vāc を繞る思索にその本質を際立せている[1]。就中ことばの解析に専心した音声学 Prātiśākhya および文法学 Vyākaraṇa の思想家は，字音の問題に格別の興味を示したと思われる[2]。そして特に彼等を悩ませた課題の一つが，字音持続の重層的性格である。重層とは，字音自体の持続系と所作としての音声の持続系の謂である。大疏Mahābhāṣya on Vārttika 4-5, A. 1, 1, 70 に於ける Patañjali（B C. 150年頃）の僅か二十行足らずの論攷は[3]，この種の議論としては異彩を放つものであり，後世の言語哲学興隆の契機となる重要な資料である。本稿は，そこに登場する〈sphoṭa〉と云う概念を，その比喩解釈を通じて解明することを目的とする。

§1.1　B C. 4〜5 世紀に成立するサンスクリット文法 Aṣṭādhyāyī では，母音の持続に次の三種が区別されている[4]。

- hrasva：a, i, u 等の 1 mātrā の持続を有する短音
- dīrgha：ā, ī, ū 等の 2 mā の持続を有する長音
- pluta：ā3, ī3, ū3 等の 3 mā の持続を有する超長音

一方 sūtra（スートラ）（簡略的散文体）に適う用語法の一つとして，短音が自体とは異なる持続を有する同族母音（長音と超長音）をも表示すると言う，同族字音 savarṇa-saṃjñā の規定が屢々調法される[5]。これと共に，或はこれに対して，同族字音中の当該字音（特に短音）のみを抽出する文法的操作が，

A. 1, 1, 70：taparas tat-kālasya,

添音〈t〉を後〔または前〕に具備する〔母音は，自体および自体と〕同一の持続を有する〔同族字音を表示する〕，

である。この定理は，例えば A. 7, 1, 9 : **a**to bhisa ais と云う男性と中性名詞の複数形・具格語尾を規定するスートラに適用され，その中の短音〈**a**〉について 1 mā の持続を有する自体だけを容認し，これと同族関係にある長音〈ā〉と超長音〈ā3〉とを排除する。しかるに聖典読誦に於ける字音の造形は，更に三種の強勢 svara と鼻音化 anunāsika の有無によって，{**a**t|a, a̱, á, ȧ, ȧ̱, ´ȧ} と云う併存する六種の同族字音の区別を齎すが故に[6]，A. 1, 1, 70 の〈tat-kālasya〉は上記の様に解釈されるのである。

ところで，字音 varṇa とは，文字ではなく，語られる中に形を成す音である。人間の意欲を介して口腔に於いて音声的に造形されることばの最小単位である。その持続の恒常性に基づいて音声学も文法学も機能する。ところが発声行為を随伴する現実下の字音造形は，多様な発声速度に於いてなされるが故に，各々の場合に応じて音声上の持続差別を惹き起こす。

MBh on Vā. 4 : yady evam, drutāyām tapara-karaṇe madhyama-vilambitayor upasaṃkhyānam kartavyam, ……, kāla-bhedāt.[7]
もしその様に〔表示される〕とすれば，添音〈t〉を後〔または前〕に具備する〔母音〕の造形が速誦でなされる場合には，並誦と徐誦で〔造形される同族字音〕の補足的言及がなされる必要がある。……。何故なら持続に相違があるからである。

独特の暗誦法に基づきヴェーダの諸聖典を連綿と口承して来た彼等は，三種の読誦様式 vṛtti を，その不壊の権威を保持する作法として厳格に遵守していたものと思われる[8]。従って発声上の速度様式の典型は，ここにある速誦 drutā vṛtti，並誦 madhyamā v.，徐誦 vilambitā v. の読誦様式に窮まる。その速度比率に関して Pat は言及を続ける。

実に速誦に於いて〔造形された〕諸字音が，並誦では三分の一倍増し

たものとなり，並誦に於ける諸字音が徐誦では三分の一倍増したものとなるからである[9]。

本来読誦様式は，個々の字音ではなく，その連続 saṃhitā としての聖句について機能する。反対論は，スートラの明言する字音個有の持続が真であるとして，連続せる字音の読誦の場合にどうして三分の一倍増 tṛibhāga-adhika と云う持続差別が結果するのかと云う矛盾を衝いている。この問題の端緒，即ちそれが意識されるに至った音声学的な背景は，恐らく対話者には自明であったが故に Pat によって詳述されていない。我々にとって幸いするのは，彼がその立場に自らを置いて組み立てたと見られるこの反論の祖型を，文法学の同胞であるヴェーダ補助学 Vedāṅga の一書に窺うことができる事である。Ṛk-Prātiśākhya の第十三章がそれである。大疏に於ける議論の進展を追う前に，我々はこの注目に値する資料によって問題の起こりを確認しなければならない。

§1.2 音声学は，字音と字音，単語と単語の結合によって本集 saṃhitā の完璧な復元を目的とするが故に，それらの連結上の細則を教える[10]。従ってその完全な遂行の為にも，字音の口腔に於ける造形過程の言及を必須とする。しかしながら Ṛg-Veda 派のこの書のごとく，読誦様式と字音生成との相関に若干であれ言及したものは余り例を見ない。RPr が今の課題に不可欠の資料を提供するのもこの理由による。

音声学一般に，字音の造形に於ける調音 prayatna に関して二種の様相が区別されている。一つは内的調音 ābhyantara-pr. であり，一つは外的調音 bāhya-pr. である[11]。RPr. XIII はまず，意欲 īhā が喉部に三様の刺戟を与え，風・気息（いき）を本質とする一種の原音（anupradāna）の通過に際し，それが字音の質料的素因 prakṛti 三種（śvāsa, nāda, ubhayau）に変容するのを援けると説く[12]。字音としては第一次の分化に過ぎないそれら三種は，自体としては個々の形相を未だ持つことなく，口腔へと運動するところから外的調音の項に挙げられる。一方，また意欲は，口腔の調音処への働きかけによって

調音手段（舌や口蓋部等）の能動・受動の分極を促し，それらの共働関係に一定の調音位 karaṇa を成就する[13]。或は調音位として自らを体現し，質料的素因に同族的な字音形相を賦与する存在位を獲得する。四種の内的調音とは，触位・開位等のこの調音位の区別に外ならない[14]。加えて重要な事は，暫時的 sthita と瞬時的 asthita の持続的差異が，この調音位に付帯されている事実である。字音持続の差異は，この差異に相応すると言えるかも知れない。

RPr. XIII, 4：prayoktur īhā-guṇa-saṃnipāte varṇī-bhavan, guṇa-viśeṣa-yogāt.

ekaḥ śrutīḥ karmanā āpnoti bahvīr, eke varṇān śāśvatikān na kāryān.

語り手の意欲属性が〔調音位と〕合一する時，字音は生成する。特性と属性が結合するが故に。一〔字音〕が行為によって沢山の音声を得る。一群〔の人々〕は〔この様な〕字音を恒常ではなく，所作であると見做す[15]。

調音位は意欲と直接に関わり，意欲自らの体現とも見做されうるから，意欲特性と呼ばれるに値する。これに対し質料的素因は，意欲と云う観点からすれば，既に喉部に於ける成立過程でそうであるが，この時調音位から字音の形相を受容すると云う意味でも二次的である。これが意欲属性と代名された所以であろう。ともあれ，個々の字音は両者の結合 yoga を俟って生成する。それは分岐した意欲の再度の合一 saṃnipāta でもある。字音が持続を帯びるのは，ここを措いて他にない。

しかしながら意欲が意欲自体に基づき，内的に字音を志向しつつそれを成就するに対し，行為 karman は，その志向性を模倣するも，自体が既に意欲から乖離しているが故に，所作性を本質とする音声 śruti を派生させる。かの一群の人々の立場を代弁すれば，この様な原理となるかも知れない。しかし字音の生成と発声行為の始点の相関について，テキストはより以上の詳細を語っていない。僅かに，音声的な字音を繞る評価に関して，意見の相違があったら

しい事情を伝えるばかりである。

この様に一詩頌に於いて二つの様相は交錯するが，発声行為に関しては，その詳細が章の後半に於いて語り継がれている。しかもその内容こそが，大疏の反対論と一致するのである。

RPr. XIII, 18-19：讃歌（ことば）の三種の読誦様式は徐誦と並誦と速誦であると教えられる。読誦様式の相違に於いて行為差別 karma-viśeṣa が語られる。読誦様式ごとに音長差別 mātrā-viśeṣa が現象するからである。復誦の為には速誦を，読誦の為には並誦を，学生教授の為には徐誦を実行すべきである[16]。

ここには三種の目的に沿って三種の読誦様式が個別に実施される事，またそれには行為差別の伴う事が明確に表明されている。讃歌の読誦様式が話者の行為性に貫かれている事実は，XIII, 4 に於ける音声が，生成 √bhū を本質とする字音と対蹠的に，行為 √kṛ を本質としていた事と併行する。また読誦様式の実践を通じて生起する音長差別が，Pat の証言する三分の一倍増説に相当する持続差別の謂であり，「一字音が沢山の音声を得る」事態の吹き替えである事も明らかであろう。

讃歌の持続とはおよそそれを構成する字音持続の総和であり，三分の一倍増は単位である個々の字音持続に近似的に実現している筈である。果せるかな，別の音声学書は，持続計量の基準を並誦に求めるべき事を規定する[17]。仮りにこの説が真であるとすれば，例えば〈**a**〉について次の音長差別の表示を得る事になろう。

vṛtti / varṇa	drutā	madhyamā	vilambitā	
hrasva-〈a〉	$\frac{3}{4}$ mā	1 mā	$\frac{4}{3}$ mā	1
dīrgha-〈ā〉	$\frac{3}{2}$ mā	2 mā	$\frac{8}{3}$ mā	: 2
pluta-〈ā3〉	$\frac{9}{4}$ mā	3 mā	4 mā	: 3
	9 :	12 :	16	

この近似値的な音長差別は，少くとも字音造形の実情に適っている。調音位に関する共働関係の始点から終点の持続幅は，字音と音声の持続に相当すると考えられるからである。結果的には字音の生成過程と発声過程は，一種の重層構造をなしている事になる。すると奇妙な事態に突き当る。字音持続として恒常不変の筈の 1 mā の短音が，並誦では良いとして，徐誦では $\frac{4}{3}$mā に増大し，速誦では $\frac{3}{4}$mā に減少する事となる。この由々しい事態こそが，Vā.4 の反対命題として集約されているのである。

§1.3 ところで Pat は，大疏の劈頭にて言葉 śabda を繞る従来の諸説を掲げ[18]，就中「言葉と表示対象と結合関係は極成である」と云う Vā に対して，三様の観点から用語分析を試みている。今，その観点を挙げれば[19]，

観点(1) 語の表示対象は形相 ākṛti である。この場合，形相は恒常で個物 dravya は非恒常である。

観点(2) 語の表示対象は個物である。この場合，個物は恒常で形相は非恒常である。

観点(3) 語の表示対象は形相でもある。この場合，形相も恒常である。形相に於いて，個物の実質的様態 tat-bhāva は損なわれないからである。

観点(1)が従来の定説としての性格が濃厚である事は，考察開始に於ける端的な解答提示の仕方から概ね推察される[20]。この説では個物の恒常性は全く否定されている。しかるに観点(2)と(3)では，個物説からのポリフォニックな解決が図られている[21]。まず個物の実質を転変する個物から逡別する事によって，個物の恒常性を主張する。次で，一度は一個物の表層に束の間止住するものとして否定された形相が，複数の個物間に同時的に住しているものとして，その恒常性が回復される。従ってこの個物説は，個物の実質に第一義の恒常性を認めた上で，更に，そこに於いても個物の実質的な在り方が損なわれない所の類的形相について，その恒常性をも追認している。

さて造形された字音も個物に斉しい。そこでかの音長差別の問いに以上の三

つの観点を応用すると，少しく興味ある展望が開ける。観点(1)であれ(3)であれ，形相説に立つ限り，それが個物の相違を超えた共相を対象とするのであるから，言わば字音配列の認識上の構図によって持続差異は決定される。従って音長差別はさ程の困難もなく解決されよう。これに対し，個物説(2)から字音の実質を証明するには相当の困難を伴う。1 mā の恒常なる字音持続が読誦様式の相違に基づき個々に増減し生滅する事態を，二つの持続系の重層性のもとに解決しえないからである。

以上の準備的考察の収穫として我々が銘記すべきは，重層説の斉す二律排反の解決にあたって Pat が，認識的な場に成立すると見られる形相説に立脚するのか，それも字音造形の場に関わる個物説に基づくのかと云う点である。音声学の証言も，また言葉の本質を繞る彼自身の議論も，その趨勢が後者に赴いている事を暗示している。

§2.1　Pat による字音持続の恒常性の擁護は，大疏の作法に従って Kāt の Vā.5 の用語解説を以って開始される。

> それは極成である。どうしてか？　諸字音は速誦・並誦・徐誦の孰れに於いても，その持続が確定している。しからばどうして読誦様式の差別は作られるのか？　語り手の遅速の口調に基づいて読誦様式は差別される。或る語り手は早口である。早口に諸字音を語る。或る者は徐ろに，或る者は更に徐ろに〔語る〕[22]。

Kāt の主張（下線部）は，既に吟味した RPr. XIII 程に字音造形に言及してはいない。むしろ Pat が分析した観点(1)の形相説から端的に解答がなされていると云うべきであろう。

> 譬えばそれは，実に同一の道程を，或る者は速く行き，或る者は徐ろに行き，或る者は更に徐ろに行くに斉しい。車上の人は速く行き，馬上の人は徐ろに，徒歩の人は更に徐ろに〔行くが如し〕[23]。

Pat のこの比喩は，命題の論旨通り平明であるが故に，所比・能比の関係に疑問の余地はない。諸字音は恒常不変の大地に定位する同一の道程に[24]，読誦様式の差別は，速く行く（速誦），徐ろに行く（並誦）等にそれぞれ比定される。かの音声学書に関して議論の引き鉄となった二つの持続系の計量単位 mā の重層性に対し，この場合の能比では距離と時間と云う様態分離が著しい。それは恒常なる形相と非恒常なる個物の対比を想起させる。反論の鋒先きもこれを反映してか，所比と能比の不整合に対してはもとより，不動の大地に象徴される字音持続の静的な恒常観念に切り込まれる。

> この比喩は不整合である。ここでの道程は歩むと云う行為の場所的要件 adhikaraṇa である。その場合，場所的要件が増減 vṛddhi-hrāsau する事などありえない[25]。

語り手の意欲が，字音自体を内的に志向し字音を成就する一方，行為は乖離的にそれに関係し，結局，字音的な音声を所作として作り出す。或はむしろ，意欲と行為の相違は極めて隠微であり，字音は語り手の造形的対象である。この点で，比喩が字音持続を対象 karman としてではなく，行為の場所 adhikaraṇa に譬えた事は，所比に対する能比の不整合として批判されよう。換言すれば，字音造形に於ける主格—対格の構造を，道行きに於ける主格—処格のそれで譬える事になる。しかも非はそれだけに止まらない。よしや発声行為がその基柢 adhikaraṇa に生成する字音持続を予定するとしても，重層性の齎す矛盾，即ち 1 mā の短音が徐誦，速誦に於いて $\frac{4}{3}$mā および $\frac{3}{4}$mā に増減する力動的な事態を，この処格は表現しえないのである。

ところで，この比喩批判は単なる反論として終始しない。見方を変えれば，大疏に於ける議論の転向点を印している意味で，重要な布石である。Kāt の Vā. 5 の解釈の後にこの論難を挿入する事によって，Pat は個物説に立った場合の最も厄介な問題を正面に据える。その困難性は，字音持続が読誦様式に対して伸縮無礙に適応するのは何故かと云う点に集中する。彼の〈sphoṭa〉と云う新機軸は，この難題に対する解答の体裁を取って登場するのである。

しからばこうである。ことばとはスポータであり，ことばの属性が音声である。どうしてあるか？　鼓手（又は，太鼓の打撃）の如し。譬えばそれは，太鼓を打った後に或る鼓手（又は，太鼓の打撃）は二十歩を行き，或るものは三十，或るものは四十〔歩を行くに斉しい〕。スポータは実に同等であって，増大は音声によって作られる[26]。

スポータ sphoṭa なる語は，特に「蕾が開く」を意味する √sphuṭ の名詞形である[27]。M-Williams の梵英辞典によると，(1) to burst or split open (with a sound), (2) to expand or blossam, (3) to crack the joints of the finger or crackle (as fire), (4) to burst into view or appear suddenly, 等の語義が，大疏より古い典拠も含めて挙げられている。これらの概念の孰れもが，字音造形の瞬間的かつ力動的な様相と何らかの類縁を示している。

ところで Kāt の活躍せるＢＣ．250年頃と云えば，マウリヤ王朝のアショーカ王が，凄惨な戦いの末にカリンガ国を征服した時期にあたる。インド全土を統一するこの王朝は，既に数十万に及ぶ軍隊を擁し，その組織にも歩兵・騎兵・戦車兵・象兵の四軍の充実を見，鼓手もこれに組み込まれていたと云う[28]。この様な事情は，Pat在世の戦乱の止む事ないＢＣ．150年頃にも妥当すると考えられる。従って当時，車 ratha と云えば戦車，馬 aśva と言えば騎馬を想起する程に，それらは重要な国家存立の基盤であったらしい。この歴史的事実と，比喩が本来最も普遍的な事実を能比とする特性とを併せて考慮する時，三様の歩みを譬えた第一の比喩の後半が，直ちに三軍の兵士像を聞く人に悟らしめたであろう事は想像に難くない。この印象の強さは，第二の比喩に於ける「太鼓」bherī によって一層高められる。それは単なる楽器と云うよりも，合戦の重要な軍備，全軍の士気を昂め進軍・退脚の合図を知らせる陣太鼓を連想させる[29]。叙事詩 Mahābhārata はその辺の事情に詳しい。

MBhr. Ⅳ, 111, 39-41：葦笛と法螺貝が吹き鳴らされ，陣鼓 bherīṇām の大音響と戦車の号音とが両陣営に一斉に湧き起こる。……壮大な合

戦に於いて，〔車上の〕馭者と戦士は敵〔の戦車兵〕に，象軍は象軍に，歩兵 padātayaḥ は歩兵に打ちかかれり。

Pat が使い分けた二つの比喩は，文章構造に於ける類似性（kaścit……gacchati の反復）と概念上の連関（戦場の機能的連関）と云う点で，否定する事のできない親和関係に立っている。だがこれが彼のスポータ説の解明にどのように役立つかは後に語るであろう。

§2.2 Pat の案出したスポータの比喩の，所比の晦渋さに対する能比の表現上の簡略は，テキストの校訂にも微妙な蔭翳を投じている。筆者は次の三種のテキストを参照した。

(1) F. Kielhorn（以後K版と略す）.
bheryāghātavat | tad yathā bheryāghātaḥ | bherīm āhatya kaścid viṃśati padāni gacchati kaścit triṃśat kaścic catvāriṃśat |

(2) Bhārgavaśāstrī, Bombay, 1951（以後Bh版と略す）.
《bheryāghātavat》, tad yathā—bheryāghāto bherīm āhatya…… |

(3) Vedavrata, Gurukula Jhajjar, 1962（以後V版と略す）.
| katham? bheryāghātavat | tad yathā—bheryāghātaḥ | bherīm āhatya…… |

三版ともに〈bherīm āhatya〉以降に相違はない。しかし〈bheryāghātavat〉の著作権の扱いと，〈tad yathā bheryāghāta〉の解釈に相違が認められる。まず第一の問題について，K版とV版とは Pat の大疏の一部と見做しているに対し，Bh 版だけは Kāt の Vā. 6 として位置づけている。第二の問題については，K版が単純な置き換えとも取れる〈tad yathā bheryāghātaḥ〉と云う一文の終止形を採用しているに対し，V版は基本的にK版と同意を示すも，〈yathā—bheryāghātaḥ〉の〈—〉によって比喩の勢いが次文まで及び，その主格〈kaścit〉が〈bheryāghātaḥ〉である事を示唆する。Bh 版はこれを更に徹底させ，終止符を取り去り，〈bheryāghāto〉として文章の継続主張をする。ただ前者の相違に比べ，この相違は比喩解釈にそれ程の影響を与えない。

Pat の換言の理由は，Bh 版と V版に指示されている通り，後続の主格〈kaścit〉の表示に〈°-vat〉と云う不変化辞がそぐわない為である。〈bheryāghātaḥ〉は，〈kaścit〉の所註と一致すると考えて良いであろう。

次に〈bheryāghāta〉を繞る語義解釈の相違を代表的なふたりの学者の所説に求め，スポータの比喩解明の手懸りとしたい。

解釈〔I〕 bheryāghāta=「陣鼓の打撃」，J. Brough, 1951.[30]
Like a drum-beat. When a drum is struck, one drum-beat may travel twenty feet, another thirty, another forty.

K版を批判的に解した Brough は，Bh 版と同様に〈bheryāghātavat〉を Vā. 6 と見做し，二文を〈like a drum-beat〉の一文で訳している。彼の説によると陣鼓の打撃が，撃力の強弱の相違によって三様の到達距離を実現する。この場合，能比と所比の関係は今一つ明瞭ではないが，恐らく打撃の即時的な様相をスポータに，空間を飛翔する陣鼓の音響が果としての音声持続に比定せられていると思える。

"But the sphota is of precisely such and such a size, the increase in length is caused by the sound." From this context it is clear that the word as the sphota, in Patañjali's view, consists of a fixed pattern of letters, with long and short vowels.

彼のこの様なスポータ解釈は，〈bheryāghātavat〉を Kāt の Vā. 6 であるとする仮説から生まれている事は明らかである。訳中の "a fixed pattern of letters" が Vā. 5 の〈varnāḥ avasthitā〉に外ならないからである。しかし一番の疑問は，陣鼓の一撃によって生じるスポータに，諸々の字音の配列が一度に決定されているかどうかと云う点である。それは明確に示されていない。

ところで MBhr の陣鼓の音響を調べる時，屢々「大なる」mahat と形容されている事に気付く[31]。実際の戦場で数百あるいはそれ以上の数の兵士に対

して号音を轟ろかす陣鼓は，その音響が大でなければならない。三軍の兵士の歩みを譬えに用いた Pat が，僅か 15〜30m の距離しか届かない音響の為に，陣鼓を能比に使用するであろうか。更にこの解釈の一番の難点は，第二の解釈が指摘する事になる。

解釈〔II〕 bheryāghāta＝「陣鼓手」，P. Filliozat, 1978.[32]
Comme les timbaliers. C'est ainsi qu'un timbalier, après avoir frappé une timbale fait vingt pas, qu'un autre en fait trente, …….

Filliozat のテキストは概ねV版と一致し，かの著作権は Pat に帰せられている。彼の訳註によって補足して解すれば，陣鼓を弱く打った鼓手は音響を聞きながら二十歩を進み，強く打つた鼓手はより長く聞くが故に三十歩を進む。この場合，スポータと音声の能比は，此々には直接に登場せず，鼓手の果す二種の行為によって関数的に暗示される。鼓手にとって本来的な行為は陣鼓を打つ ā-√han 事であり，その後の彼の歩み √gam は二次的である。前者は憚けるスポータに，後者は知覚を介して音声持続に対応する。優れているのは，この対応関係の 明確さばかりではない。〈bhery-āghāta〉と云う語の慣用法が，「陣鼓手」でなければならぬ事を立証する。

この語は，前分を〈bherī-°〉，後分を〈°-āghāta〉とする複合語である。そして ā-√han から派生した名詞〈āghāta〉が楽器を複合語の前分に取る時，慣用法上どのような 制約が生じるかが 今問題となっているのである。「打撃」と「鼓手」，O. Böhtlink の梵独辞典は，解釈〔I〕と〔II〕に登場したこれらの語義を，項を別して掲げている。まず前者の用例はより豊富である。その用法上の著しい特徴は，複合語前分に〈bhuja-°，kāra-°，pāda-°〉等の様に若干[33]を除いて，腕・手・足等の行為手段を取る事である。一方後者の用例として，〈dundubhy-°，ādaṃbara-°〉の例が挙げられ，楽器を前分とする場合に限り奏者の意味を表現すると云う。しかもその典拠を調べた結果判明する事実は，少しく暗示的である。Śatapata-Br. 及び Bṛhad-Āranyaka-Up. と

云う聖典に定型句として反復的に使用されたと見られるその用例は，究極的実在アートマンが音 śabda に譬えられる場面に登場する。

ŚB. 14, 5, 4, 7；7, 3, 8；BAU. 2, 4, 7；4, 5, 8

譬えば打たれた太鼓の外的な諸音響を把捉する事はできないが，太鼓と鼓手 dundubhy-āghāta の把捉によって〔真実の〕音が把捉される様に，それ（アートマン）も把捉される。

究極的な実在のみが真の把捉に耐えられると云うこの比喩は，言葉の本質スポータの把捉の困難性を示唆するかも知れない[34]。ともあれ古代の文法家の三傑に数えられる Pat が，この聖句を，或はこれに類した〈°-āghāta〉の用法を知らなかったとは思えない。

このアートマンの比喩が Pat 以前の資料とすれば，彼以後の最も重要な資料を Bhartṛhari（AD. 450年頃）が提供する。彼は VP. I, 103 の自註に於いて，明らかに Pat の陣鼓手の譬えを意識しながら，〈°-abhighāta〉に二種の用法を区別している。

(1) bherī-daṇḍa-abhighāta　「陣鼓のバチによる打撃」
(2) lohakaṃsa-abhighāta　「銅器の打撃」

ここでの〈°-abhighāta〉は共に「打撃」を意味する。正確には，その対象が楽器である場合と楽器以外の場合とで，その用法が二分されている。即ち前分に陣鼓を取る場合には，打撃手段のバチ daṇḍa を挿入して使用される事が例(1)で，また楽器以外であれば直接前分に置ける事が例(2)でそれぞれ裏付けられる[35]。

例(1)の語法が Bhar の〈bheryāghāta〉に対する註解であるか否かは措くとして，〈bheryāghātavat〉が「打撃」の意味であるとすればどうであろうか。その場合，〈°-āghāta-°〉は一層両義的であるから，換言に際し，〈tad yathā bherī-daṇḍa-āghātaḥ〉と註解さるべき所である。Pat の深い学識はこれをなしていない。従って，補足がなされない以上，「打撃」説は成立しな

いと判断して良いであろう。

§2.3　以上の用語分析は，解釈〔II〕の優位を教えはするが，完全である事を決定づけたのではない。この説ですら，能比の実態にどうしても納得できない点を残しているからである。Filliozat の説く鼓手の歩みは，陣鼓の音響と併行する。通常，この距離を歩むには10〜20秒の時間を要する。陣鼓の音響が，実際これ程長く持続するものであろうか。陣鼓の第一の特性が大きな音を出す事に比し，良質の釣鐘でさえと思われる音響持続を，それも古代の陣鼓に出せるとは考えられない。それとも全くの仮構であろうか[36]。

なるほど，打撃の強弱によって若干の持続差別が音響に生ずる事は否めない。しかしその場合は大小の特性が第一義であり，持続のより明確な差異は，むしろ楽器の材質の相違に関わる。音響の持つこの二つの特性を分析し，スポータ説の理解の為に比喩に使用したのはもちろん Bhar である。

VP. I, 102：調音手段による結合と分離 saṃyoga-vibhāgābhyām から生じるものがスポータであり，言葉から生じる言葉が音声であると他の者は語る。

I, 103：言葉が大であれ小であれスポータの持続は異ならず。しかるに後続する言葉の相続が増減の本質を有する。

彼は，VP, I, 102-106 に於いて Pat のスポータ説と類似したタイプを解説している[37]。そこではスポータと音声がくつきりと二分されている。そして後者について，因・言葉 kāraṇa-śabda と果・言葉 kārya-śabda の相続関係が措定され，因に持続の長短，果に音の大小を認めている。

Vṛtti on VP. I, 103：……kasyacid dhi bherī-daṇḍa-abhighāta-jasya iva kārya-paramparā dūram anupatati. kaścit tu loha-kaṃsa-abhighāta iva pratyāsanna-deśa-grāhyam dīrgha-kālam santānam avicchedena ārabhate.

陣鼓のバチによる打撃から生じた〔音響〕の如く，或る〔因・言葉〕

の果〔・言葉〕の連動は遠くまで飛翔する。しかるに銅器の打撃の如く，或る〔調音手段の打撃〕　は近くで把捉される相続を長い間途切れなく生ずる。

鼓手がここに登場しない事から明らかな様に，Bhar は Pat の用語（alpa, mahat, kaścit, bherī, āghāta）を借用しつつ，全く別の場面を仕立て上げている。恐らく Pat のスポータの情景，つまり陣鼓手の譬えの何処かに，彼を満足させぬものがあったに違いない。ともあれ，ここで注目すべきは，陣鼓の音響の特性である。遠くには届かぬが息の長い銅器の音響と対蹠されたそれは，叙事詩の証言通り大きくて遠くまで達するが，どうやら持続は短いものらしい。銅器の音響は小さいが長く，逆に陣鼓のそれは，大きいにもかかわらず短い。その短かさの故に比喩からは省かれている。

この様な音響の持つ二種の特性の使用は，何も Bhar の独創ではない。字音の造形を想起すれば，調音にかける力の大小は音声の大小に，調音位の継続は音声持続の長短に関係している事は明らかである。そして Pat も，前者については〈alpa, mahat〉，後者については〈vṛddhi-hrāsau〉によって使い分けている[88]。

さてスポータの比喩解釈を繞る論攷は，解釈〔I〕にも解釈〔II〕にも難点の存在する事を我々に告げた。その原因の多くは，Bhar の極めて晦渋な音声論の影響下に，所比であるスポータと音声とをふたつながら陣鼓の打撃と音響に当て嵌めんとする態度によると思われる。既に指摘した様に，Bhar は Pat のスポータの比喩からその支柱である鼓手を除いてしまっている。それは Bhar の恣意と云うより，Pat と Bhar を隔てるおよそ六百年の歳月が後者に強いたものであろう。それに比べればかの音声学書の伝える所は，遙かに Pat と近いものである[89]。今やそれを陣鼓手の譬えに対照させる時が来ている。

RPr. XIII, 4：語り手の意欲属性が〔調音位と〕合一する時，字音は生成する。特性と属性が結合するが故に。一字音が行為によって沢山の音

声を得る。一群の人々はこの様な字音を恒常ではなく，所作であると見做す。

Pat のスポータの比喩は，この音声学的な字音造形の一齣駒を鮮やかに模して作られている。例えば，陣鼓手とは語り手 prayoktṛ であり，陣鼓とは調音処 sthāna，バチは調音器 karaṇa に相当する。また意欲 īhā は，鼓手本来の打つと云う行為に，意欲の特性と属性の結合 yoga は打撃に，発声行為 karman は歩む行為に比定されるであろう。そして意欲が恒常なる字音の生成に充全に与るに対し，行為が人為的な音声の実現にのみ関わると云う関係は，鼓手にとって第一義的職能と二義的職能の関係に相当する(40)。

もしこの類比解釈が正しいとすれば，ここには Bhar の提示する高度に思弁的なスポータ説の一類型，≪スポータ…→因・言葉→果・言葉≫は，未だに姿を現わしていない。むしろスポータと音声の二位相は，截然と区別されていると云えよう。即ち陣鼓の打撃によって創造された音響は，単一で瞬間的な揮けること sphoṭa そのものであり，その顕現に与かる鼓手は，至近の位置を占めるが故に，閃めくスポータの実在性を直観する。アートマンのみが真実の音であると云う比喩の度合を一層強め，ここではスポータのみが音として表示され，所作性を本質とする音声は，音としての資格さえ奪われている。前者のみが個物の実質であり，恒常 nitya であるに対し，後者はその非恒常 anitya なる翳に斉しいからである(41)。従って鼓手の取る第二の行為は，陣鼓の音響から乖離し，次の打撃までの無音の時を刻む事になる(42)。

スポータ持続と音声持続が絶対的に乖離していると云うこの仮説は，或る意味で実に素朴で古代的である。しかしこの祖型的な構造は，Bhar のスポータ解釈にも跡を止めている。

VP. I, 105：長音と超長音でさえ，個物 dravya の打撃から，増大せる別々のものとして生ずる。
しかるに振動 kampa の完了するとき，読誦様式の差別を齎すナーダが生起する(43)。

I, 106：調音手段の振動が継続する間でさえ，実にスポータから他の音声が間接的に生起する。他の燃焼から燃焼が生ずる如く。

彼は，個物の打撃から生ずる音 abhighātaja と，振動から生ずる音 kampaja とを因果の観点から峻別し，後者にのみ相続関係を認めている[44]。換言すれば，調音位の持続について，その始点だけが個物の打撃に関係し，その後の振動継続は打撃からの余振と見做され，前者にスポータ，後者に音声（言葉）の因果的相続関係に立つ根源的ナーダを想定している。Pat にとっての最大の関心がスポータと音声に一線を画す事であったに対し，Bhar のそれは，スポータから音声（言葉）への形相の伝達をどのように非因果的に説くかに向けられている。それ故にこそ，両者の比喩の扱いに決定的な相違が認められたのである[45]。

ところで Bhar 所説の〈dravyābhighāta—karaṇakampa〉の関係は，音声学的な〈īhāyoga—karman〉のそれの理論的展開でもあろう。何故ならば，調音手段間の共働始点にのみ充全の意欲が与かり[46]，それから終点までの調音位の継続に於いては，意欲は褪せ，行為所成の音声が立ち現われるからである。後者には，恰も鼓手の三様の間の取り方の様に，瞬時的・暫時的等の調音位の持続差別が行為性によって実現される。計量的に言えば，スポータは常に極小点であり，音声は現実大となる。

しかしながら字音がスポータであるのではない。ことばがスポータである。既に陣鼓手の比喩の冒頭に於いて，諸字音はことばに置き換えられている。言葉が字音の集合であると云う観点からすれば，字音造形の場面は次々と反復されなければならない。事実，「陣鼓手の如し」と云う命題提示はそれを物語る。彼の役割は，一定のテンポで陣鼓を打つ事によって，軍事上の所定の合図を全軍に知らしめる事にあるからである[47]。逆に言葉の実質，一なることば，と云う観点から見れば，それは，恰も音声持続によって寸断されるかの様相を呈するが，字音造形の端緒に顕現するスポータは次のスポータを相待し，調音位の完了は次の字音決定へ赴く意欲を孕む。ことばとは，収斂して行くスポータ

の連続 saṃhitā に等しい[48]。

spoṭaś ca tāvān eva bhavati, dhvani-kṛtā vṛddhiḥ.[49]
スポータは全く同等あり，増大は音声によって作られる。

Pat は，持続とは範疇を異にする，音声の今一つの特相に対する反論を予測しつつこの註解を締括する。

言葉にはスポータと音声とがある。しかるに音声は，更に大と小の特相が区別される。或る〔言葉にはスポータと音声とが〕ふたつながら備わるが，それぞれは別々の本性に基づいている[50]。

従ってこの第三の仮説による限り，音声 dhvani によって字音持続は決定され，明確にスポータと一線が画される事になる。

（未完）

註　記

主な略号　A : Aṣṭādhyāyī, Pāṇini.
MBh : Mahābhāṣya ed. F. Kielhorn, reprint : Osnabrück, 1970.
MBhr : The Mahābhārata ed. V. S. Sukthankar, Poona, 1933
RPr : Ṛk-Prātiśākhya ed. and trsl. M. Regnier, JA. XI, 1858.
Vā : Vārttika on Aṣṭādhyāyī, Kātyāyana.
VP : Vākyapadīya ed. S. Iyer, Poona, 1966.
Bhar : Bhartṛhari.　Kāt : Kātyāyana.　Pat : Patañjali.　mā : mātrā

(1) H. Scharfe, Grammatical Literature, HIL. Vol. V, pp. 77, Wiesbaden, 1977. 尚，本稿では「ことば」と「言葉」を区別して使い分ける。前者が言葉（及び世界）の本体 Śabda-brahman と深く関係する聖典語に対し，後者は「ことば」に基づきながら，その翳として実利的に使用される世間語である。
(2) H. Scharfe, *op. cit.*, 83. vyākaraṇa の語源 vyā-√kṛ が，saṃs-√kṛ と逆ベクトルをなすと言う議論が紹介されている。
(3) MBh. I, 181, 8-24. 和訳に「大疏」を使う。
(4) A. 1, 2, 27 ; RPr. I, 6 ; Vājasaneyī-Pr. I, 59-61 etc.
尚，§1. 1-2 については，拙稿「Vā. 4 on A. 1, 1, 70 に於ける字音の造形と読誦様式」，西日本宗教学雑誌第八号（1986年刊行予定）の要約である。

(5) A. 1, 1, 9 ; 10 ; 69 etc. saṃjñā の〈a〉は〈a, ā, ā3〉を表示する。

(6) udātta, anudātta（下線表示），svarita（垂線表示）。鼻音表示は ⊙ による。

(7) MBh. I, 181, 7–11. 下線部はVā. 4 である。

(8) H. Scharfe, *op. cit.*, 78 ; 伊原照蓮，「インドにおける文法的考察の萠芽」，成田山仏教研究所紀要第七号，pp. 213。インドの聖典伝承は，完璧に発音されることばを口承する事に向う。この為，本集暗誦 saṃhitā-pāṭha と併んで，逐語暗誦 pada-pāṭha が採用されたと言う。

(9) MBh. I, 181, 11–12.

(10) 辻直四郎，インド文明の曙，p. 7–8, 1957.

(11) W. S. Allen, Phonetics in Ancient India, pp. 22, London, 1953.

(12) RPr. XIII, 1–2.

(13) RPr. XIII, 3. ここでの karaṇa は，機能的に分極された調音器と言うより，調音処との共働関係に立つものとして使われている。

(14) Cf., MBh. I, 64, 7–9 : spṛṣṭam, īṣat-spṛṣṭam, vivṛtam īṣat, vivṛtam.

(15) Cf., MBh. I, 6, 12–14. Saṃgraha の著者は，言葉の本質を nitya と kārya の両面から考察していたらしい。

(16) RPr. XIII, 19＝Pāṇinīya-Śikṣā. 22≒Uddyota on Vā. 4, A. 1, 1, 70.

(17) H. Lüders, Die Vyāsa-Śikṣā, p. 15 ; 97, Göttingen, 1894.

(18) H. Scharfe, *op. cit.*, 124–125. 言葉の所詮について，形相説に立つ Vājapyāyana に賛同するのは Kāt であり，個物説に立つ Vyāḍi と Pat は強い親和関係が認められると言う。尚，RPr の数箇所（就中 XIII, 15）に Vyāḍi の名が認められる。

(19) MBh. I, 6, 16–8, 2. Vā : siddhe śabda-artha-sambandhe の解釈，就中 7, 8–25 が問題となる。

(20) 「この場合，形相が恒常であり，個物は非恒常である」と言う月並みな解答だけである。

(21) 「粘土はある形相と結び球となり，球の形相は壊されて壺となる。壺の形相は壊されて……」と幾つも転変の例を挙げた後，「形相は次々と異なるとも，個物〔の実質〕は同じである」と解説さる。その例示の特徴は，同一の個物の形相上の変化を示す事にある。解釈(3)では，「或る所で壊されるとも，すべての場所で壊されるのではない。他の個物に存る形相が知覚される。」この場合の特徴は，同類の個物間に認められる類的形相について論じる点である。

(22) MBh. I, 181, 13–16. Vā. 5 : siddham tv avasthitā varṇā……の siddham は註(19)の siddhe と同一である。

(23) Do., 16–18.

(24) Do., 6, 19 : siddhā pṛthivī を前提としている。

(25) Do., 181, 18-19. (　) によって二様の解釈を掲げた。後にこれを論ずる。

(26) Do., 19-22.

(27) 中村元，ことばの形而上学，p. 288，註11，1981 第三刷。

(28) 中村元，インド古代史上，p. 197；402；419-420；469-480等。

(29) P. Filliozat, Le Mahābhaṣya de Patañjali, p. 352, PIFI. No. 54, 3, 1978. 尚，bherī の用例は，MBhr では約70例にのぼり，大半が戦場を場面とする。

(30) "Theories of general linguistics in the Sanskrit grammarians", reprint : F. Stall, A reader on the Sanskrit grammarians, p. 406-7, Cambridge, 1972. 同様の見解は，M. Biardeau, Théorie de la connaissance et philosophie de la parole dans le brahmanisme classique, p. 368, Paris, 1964.

(31) 少なくとも13例を数える。

(32) P. Filliozat, *op. cit.*, p. 352 and notes. Cf. S. Iyer, "Bhartṛhari on Dhvani", ABORI, 46 p. 50-51, Poona, 1964.

(33) 打撃の対象を前分に取る例はあるが，それは楽器以外のものである。
ṭaṭa-° : the butting (of elephants) against banks.

(34) D. S. Ruegg, Contributions à l'histoire de la philosophie linguistique indienne, p. 50, note 3, Paris, 1659.
梵我一如の悟りは常人にありえない。ヨーガ行者に個有のアートマンの直観が，スポータの比喩と類似の構造で譬えられている事は，少なからず暗示的である。

(35) 註(33)を参照せよ。

(36) Kaiyaṭa, Pradīpa on A. 1, 1, 70 (V版, Vol. I, p. 540). Kaiyaṭa は kaścid =bherīśabdaḥ kaścid として，持続に三種の区別をしている。恐らく Filliozatはこれに基づいて解釈している。従って彼は，この比喩を単なる類似性に限定する。

(37) Vṛtti on VP. I, 102 : anitya-pakṣe sthāna-karaṇa-prāpti-vibhāga-hetu-kaḥ prathama-abhinirvṛtto yaḥ śabdo sa sphoṭa ity ucyate. 非恒常とは，音声はすべて所作であると言う意味である。従って知 buddhi も karya と見做す。Pat が果たしてここまで極端であったかは疑問である。Cf. MBh-dīpikā, p. 76, ll. 5-16.

(38) MBh. I, 181, 24 : alpo mahāṃś ca. 19 : vrddhi-hrāsau. 23 : dhvani-kṛtā vrddhiḥ.

(39) J. Cardona, Pāṇini, a survey of research, 273-275, reprint : Delhi, 1980.

(40) 対比に於ける相違は，字音の造形とスポータの顕現と言う点にある。Cf. MBh I, 254, ll. 10.

(41) 註(15)，(18)，(20)，(21)を参照せよ。

(42) Filliozat の大疏の訳自体は，全く正しいと思われる。

(43) 個物の打撃は全く同等である svarūpam eva hi tayor tāvadbhir [dravya-]

abhighātair niṣpādayitum śakyate (Vṛtti on VP. I, 105)。

(44) 個物の打撃から生じる śabda=sphoṭa は果を決して生じない yāvān abhighāta-jaḥ śabdo……asau kadācid apy anārabdha-karyo (Vṛtti on VP. I, 106)。

(45) Bhar にとって，Pat の陣鼓手の譬えの持つ絶対的な乖離の構造は，スポータの孤立を意味した。スポータと音声を近接させる為には，Pat の比喩の支柱である鼓手を除かねばならなかったと考えられる。これによって《sphoṭa…→kāraṇa・śabda →karya・śabda》，《sphoṭa…→prākṛta-nāda→vaikṛta-nāda》を説く事が可能となるのである。しかし両者のスポータと音声に関する理解に，本質的な相違はないであろう。

(46) Vṛtti on VP. I, 102. nitya 説であれ，anitya 説であれ，スポータは調音手段に関して合生と離生の本質を有する。

(47) MBhr に於ける bherī の大半の用法は複数形である。就中III, 41, 21；VI, 1, 15；VII, 18, 20 は千回 sahasraśaḥ，IV, 53, 10 は百の陣鼓 bherī-śata，VI, 56, 12 は千の陣鼓 bherī-sahasrāni。陣鼓は一斉に打ち鳴らされるが故に，次の打撃までは，歩みの数によって間を計ったと推測される。それでなければ，同時的な打撃は不可能である。この様な軍規上のテンポは，読誦様式の遵守と軌を一にする。また Pat が使った二種の比喩は，ここに於いて連絡する。

(48) Cf. Vāj-Pr. V, 162：sphoṭaṇam ca kakāra-varge vā sparśāt.「子音の後に喉音が続く場合，その間が途切れることは過失である。」本来連続しているものが断ち切られると言う点で，スポータの今一つの様相を暗示する。

(49) MBh. I, 181, 21-22. Cf. Vṛtti on VP. I, 49.

(50) Do., 23-24.